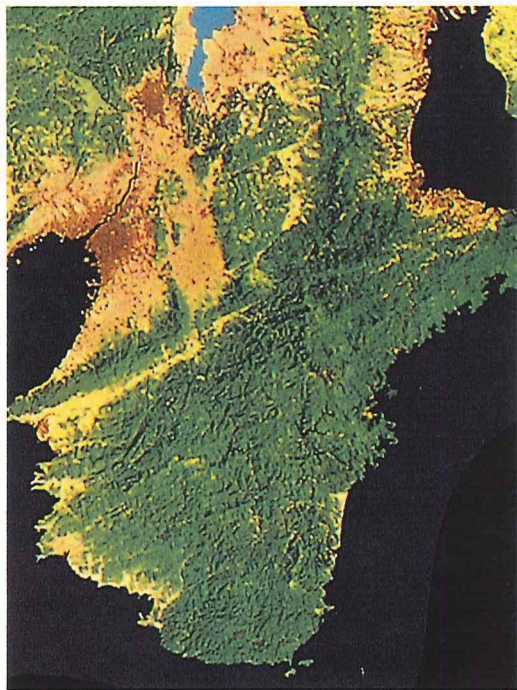


地 形



紀伊半島

本県の地形は、県のほぼ中央を西流する吉野川を境として北部の低地帯と南部の山岳地帯に分かれています。その吉野川にほぼ沿って中央構造線が通り、北部は内帯、南部は外帯に属しており、非常に対照的な地勢を示しています。

★北部低地帯……複雑な丘陵と小盆地からなり、大別すれば大和高原、宇陀山地、奈良盆地からなり吉野郡を除くほとんどの市町村はこの北部低地帯に属しています。

大和高原は奈良盆地と上野盆地にはさまれた高原で、北は木津川、南は初瀬川、宇陀川によってくぎられています。ほぼ400～500mの標高をもち、なだらかな小丘陵の起伏があり、河川は多くありません。添上、山辺郡の各村があり古くから開発されています。山添村では縄文時代草創期の土器が発見されています。

宇陀山地、宇陀盆地、高見山地、室生火山群および竜門山地（独立地形区とも考えられる）からなる複雑な地形区は、大和高原の南方に位置し東部は鈴鹿山脈・布引山地に接し、西は竜門山地を経て金剛山地に、南は吉野川に沿う中央構造線におよびます。

奈良盆地は県の北西部を占めており、面積は約300km²で、盆地底の標高が40～80mの沖積層盆地です。盆地面積は県全体の8％にすぎないが、この平坦で肥沃な地域は水田耕作に適し、古代には国政・文化の中心地でした。

今も県の中核的位置を占めています。

河川は盆地の四周から小河川が集まってきています。それらは大和川となって大阪湾へ注いでいます。

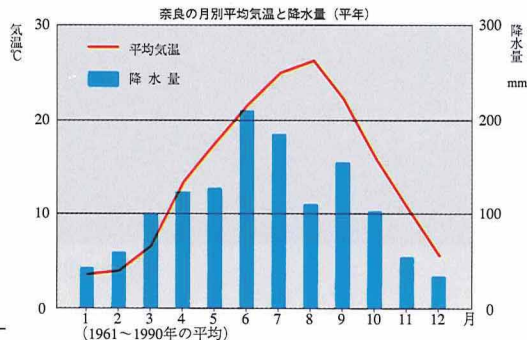
また奈良盆地と大阪平野を隔てる金剛山脈が南北に走り、標高 1,125m の金剛山をはじめ、葛城山、二上山、生駒山などの山々が約 45km にわたって連なっています。成因は断層作用によるが、二上火山群なども含む地形区です。

★南部山岳地帯……県総面積の 60% 以上を占めるこの地区は、紀伊山地の主部にあたり、東部の大台ヶ原山（標高 1,695m）を中心とする台高山脈、西部の伯母子山地、さらに中央部の十津川、北山川の深い渓谷にはさまれて大峰山脈が連なる大山岳地帯です。その雄大な壮年期の地勢は北部低地帯とは対照的です。

また河川は、吉野川、北山川、十津川などいずれも壮年期河川が深い V 字渓谷をなして曲流し、山岳美と渓谷美にすぐれています。この地域は吉野熊野国立公園の主要部であり、林産資源とともに本県の重要な観光資源となっています。

気 象

本県の気候はその地形と同様南北で大きく相違します。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候です。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねています。すなわち南部の山地は夏は雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深くなります。一方奈良盆地はおおむね雨は少なく、夏はむし暑く、冬は底冷えがきびしくなります。一般的には台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山・がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っています。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起こります。



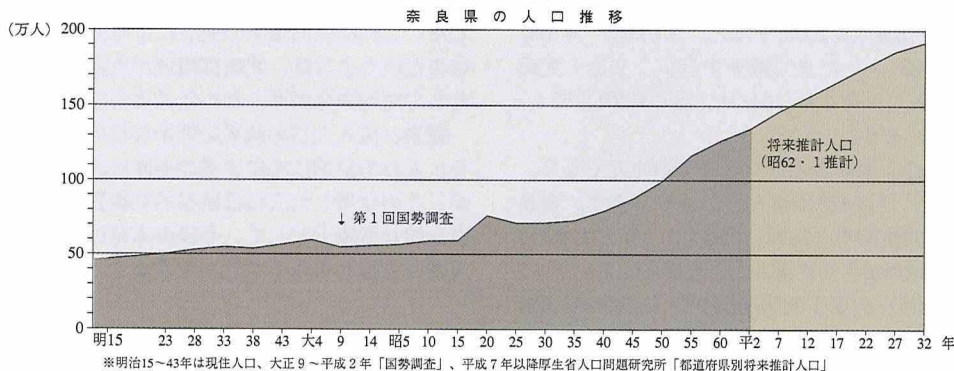
人 口

石器の材料サヌカイトの産地二上山をもつ奈良県では旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られています。

先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、近畿の人口は縄文時代にはほぼ300人～4,400人の間で推移していたが、弥生時代には108,300人程に急増したとされています。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであろうと思われまます。

大和に朝廷が成立し政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなりました。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくみると7万人前後、多く見積って20万人の人口を持ったといわれています。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/㎢程になり、唐の長安よりやや少なく平成2年の大阪市（12,000人/㎢）より多くなります。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことには変わりありません。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については13万人説と6万5千人説とがあります。当時の政府が必



ずしも全ての人々を把握していないため、実際の人口はどちらの推計でももう少し多かったであろうと考えられます。

中世の人口は史料がないため知ることができないが、江戸時代になると八代将軍徳川吉宗の時代の享保6年(1721)から始められた全国人口調査があります。第2回目は同11年に実施され、以後6年毎に行われました。この調査は、武士の人口や年少者の人口などが除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口よりいくぶん過少であると思われます。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができます。

享保6年の413,331人を100とすると、天明6年(1786)には81.4(336,254人)にまで減少するが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年(1846)には87.4(361,157人)にまで回復しています。

明治の初めには、本県の人口もほぼ実勢に近くなり、明治5年(1872)には423,004人となっています。奈良県再設置当時の明治20年(1887)には491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示しています。

大正9年(1925)の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示しました。

その後、人口は60万人程度で安定していたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にベビーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加しました。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部での過疎化が同時に進行したが、県全体としては著しい人口の増加をみることになります。国勢調査で対前回増加率をみると昭和45年で12.6%、55年では12.2%と高い伸びを示しました。平成2年では、人口は1,375,481人であり伸び率は5.4%とやや鈍化しています。

本県では昭和38年以来一貫して人口が転入超過であり、40年代、50年代の高い人口増加率の要因はおもに大阪を主とする他府県からの人口の流入によってもたらされました。これは県内産業の発展による労働力の吸収によるものというよりは、北西部地域が大阪大都市圏の通勤圏として宅地開発が進んだことによるものです。

従来、流入人口の就業先のかなりの部分が大阪府にあり、人口の急増は本県産業の発展に直結しませんでした。この急増した人口は潜在的な購買力として、また、潜在的な労働力として、今後の本県の産業発展を支える重要な支柱ともみることができます。

産 業

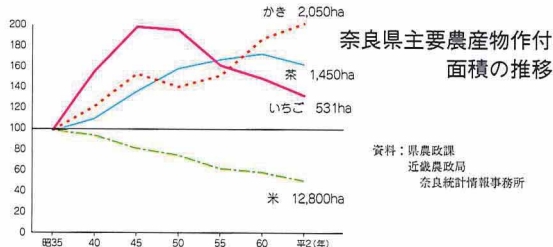
〔農業〕

奈良盆地では、古くから農耕文化が発達していましたが、降水量が少なく十分な農業用水が確保できずに、たびたび干害を受けました。そのため、古代から多くのため池が作られ、多いときには大小あわせて5,000余りもありました。

中世には二毛作が始まり、近世になると、綿や菜種、煙草等の商品作物が広く栽培され、畑作がいっそう発展しました。これは水不足を解消するための有効な方策で「田畑輪換」と呼ばれています。

米は、明治中頃から大正時代にかけて、10aあたりの収量が全国1、2位を競い、「奈良段階」と呼ばれたほどです。

近年は、京阪神の大消費地への至近性を活かし、果菜類や軟弱野菜等の土地生産性の高い農業が行われ、生鮮食料品の供給基地として大きな役割を担っています。



一方、大和高原や五条吉野地域の中山間では地域の特性を活かした、夏どりほうれんそう、だいこん、茶、果樹、植木などの栽培や畜産がさかんに行われています。

とりわけ、茶、かき、うめ、いちごは、全国屈指の収穫量を誇り、「大和茶」、「大和のかき」、「奈良いちご」の銘柄で好評を博しています。

県では、21世紀に向けて農業の進むべき方向を明らかにした「奈良県農業振興計画」(NAP21)を策定し、ゆとりと活力ある農業農村を目指して、諸施策を展開しています。

〔林業〕

本県の林業は、県総面積の78%を占める恵まれた森林と膨大な木材の蓄積を背景に、基幹産業として重要な地位を占めています。

吉野郡では江戸時代から植林が始まっており、森林の半数以上がスギ・ヒノキで占められ、また、明治時代には多くの村外の地主が、林業経営にのりだし、森林の大半は民有林になっています。本県林業は、地質と気象条件に恵まれているうえ、密植多間伐という独特な育林方法がとられているため、いまでは1haの蓄積量は全国平均の1.5倍になっています。また、木材の輸送方法も筏流しから陸送に移ったことにより、吉野・桜井地域に木材工業が発達し本県の地場産業として大きな位置を占め

ています。しかし近年は山村の過疎化により、林業従事者が減少、高齢化するとともに、外材との競争の激化、代替材の進出、住宅着工戸数低下による木材需要の伸び悩みなど、林業を取り巻く環境は厳しい状況にあります。

〔工業〕

奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・薬・漆器・素麺・清酒・茶筌・割箸・赤膚焼など、江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多くあります。

江戸時代には、奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業が発達していました。明治7年(1874)には奈良県は全国府県中、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、菜種油9位の生産をあげ全国でも先進的な地域に属していました。そのため資金が豊富で明治16年(1883)には早くも近代的紡績工場が設立されましたが、この工場は石炭の入手や、営業面でおもわしくいかず廃業となりました。

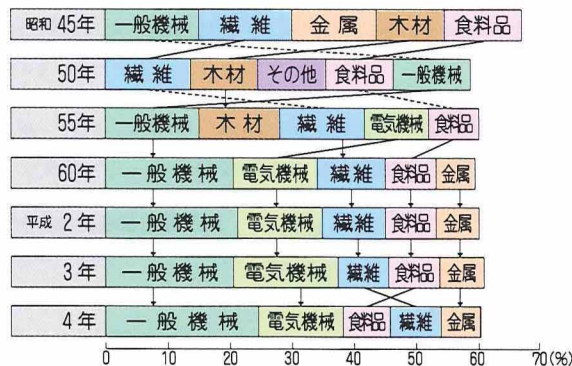
明治26年(1893)、同29年(1896)に新たな近代的紡績工場がそれぞれ設立、同27年に電気・同44年にガスの供給が始まるなどめざましく近代化していきました。

しかし、奈良の位置が東西幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年(1919)にもちこされました。

昭和のはじめには、紡績業の生産は安定し木綿や絹から変わったメリヤスや、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の形成も進みましたが、戦争のために挫折するものが多くありました。

戦後、奈良県も復興の途につきましたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度成長期にも繊維、木材、食品等の業種が大きなウエイトを占めていました。本県は内陸に位置し港湾を持たないので、重化学工業には工場立地の上で制約が大きかったためです。このため、昭和30年代末から県では

出荷額等上位5業種の変遷



資料：県統計課「工業統計調査結果報告書」

〔商業〕

江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ2大商業中心地でした。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展していました。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に包含され本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わりませんでした。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（今の近鉄）上本町～奈良間の開通をはじめとする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるどころもありました。

しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもありました。昭和5年の国勢調査によると、商業従事者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分1人で営業しているものが32%も占めていました。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（現、奈良銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献しています。

昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、現在もお増加を続けています。こうした傾向は、購買力を高め、商品販売額等の増加に結びつきました。本県小売業の年間商品販売額は、平成3年の商業統計では初



生駒市びっくり通り

めて1兆円を突破しており、昭和54年から平成3年にかけての商品販売額の伸び率は近畿府県のなかで最も高くなっています。

一方、今日の中小小売商業を取り巻く環境は、消費者ニーズの多様化・高度化、モータリゼーションの進展、都市構造の変化による都市中心部の既存商店街と郊外の新商業集積との競争の激化などにより、厳しさを増しています。

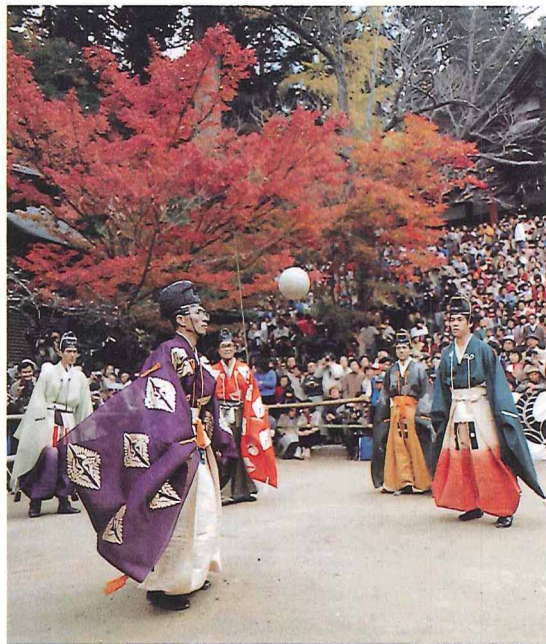
これからの奈良県の商業の発展のためには、単なる買い物場のみではなく、人と人がふれあい・憩い・集う「暮らしの広場」としての商店街づくりなどが求められています。

文化・観光

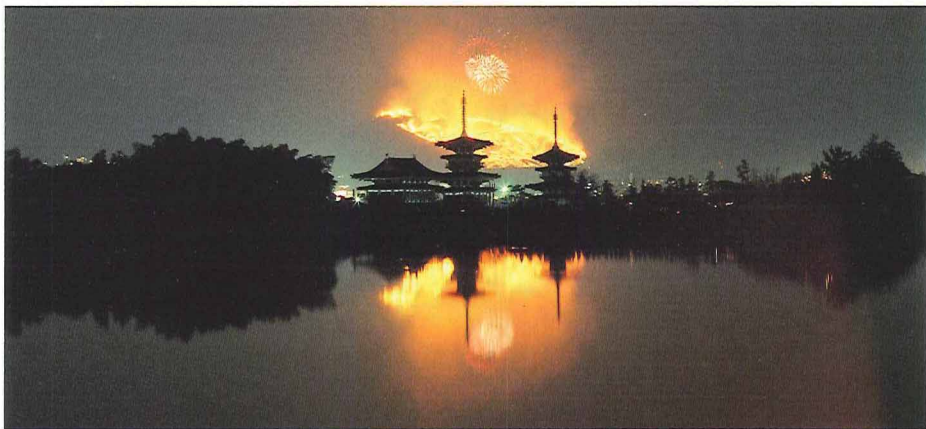
多彩で豊かな自然と世界に誇る貴重な文化遺産に恵まれている奈良県は、古代から政治の中心として、大陸からの文化を積極的に取り入れてきました。特に古墳時代、飛鳥時代、奈良時代には、遣隋使、遣唐使等の国際交流を通じて、日本文化の基礎を築きあげ、さらに、中世には、社寺、町家を中心に能・狂言の発祥の地として、日本文化の発展に貢献してきました。

また、近世から明治・大正・昭和にかけては、さまざまな文人墨客をはじめ多くの当代の英傑たちが、奈良の豊かな自然とそこに住む人々が育んできた伝統文化を賛美してきました。奈良は、「日本人の心のふるさと」であり、世界に誇り得る日本文化の中心となっています。

こうした奈良が育み培ってきた貴重な文化遺産や歴史的風土の保存を図るとともに、新たな個性と魅力にあふれた奈良県文化を創造し、次の世代に引き継いでいくことが今後の大きな課題となります。



談山神社けまり祭



若草山焼

本県の観光は、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財観光と、山岳地域の自然観光に大別されます。

奈良、斑鳩をはじめとする各地の古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、国宝・重要文化財の数は、東京、京都について多くあります。古社寺のほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡や南朝のおかれた吉野の地などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れるひとつとは後をたちません。

また、千年以上の歴史をもつ吉野山の桜、葛城高原の

つつじなどの季節の花々や、大台ヶ原の景観、大和アルプスと称される大峰山脈を中心に2,000m級の山々が連なる吉野熊野連山の雄大な自然が、全国的な都市化によって緑が失われていく中で今もお美しい姿を残し、ひとつにこころの安らぎを提供しているのです。

本県には毎年多くの観光客が訪れていますが、余暇の重要性が見直されている昨今、観光需要は今後さらに量・質ともに高くなるでしょう。こうした中で奈良県はますますその価値を増しつつあるのです。

主要山岳一覽表

(單位：m)

山岳名	標高	所在地	山岳名	標高	所在地
若草山	342	奈良市	白鬚岳	1,378	吉野郡川上村
三輪山	467	桜井市	大台ヶ原山	1,695	吉野郡上北山村(三重県境)
耳成山	140	橿原市	山上ヶ岳	1,719	吉野郡天川村
天香久山	152	〃	大普賢岳	1,780	吉野郡上北山村(天川村境)
畝傍山	199	〃	弥山	1,895	吉野郡天川村
生駒山	642	生駒市(大阪府境)	八剣山	1,915	吉野郡上北山村(天川村境)
信貴山	437	生駒郡平群町	仏生ヶ嶽	1,805	吉野郡上北山村(十津川村境)
二上山 (雄岳)	517	北葛城郡當麻町	釈迦ヶ岳	1,800	吉野郡十津川村(下北山村境)
葛城山	959	御所市(大阪府境)	涅槃岳	1,376	吉野郡下北山村
金剛山	1,125	御所市	笠捨山	1,352	吉野郡十津川村(下北山村境)
俱留尊山	1,038	宇陀郡曾爾村(三重県境)	玉置山	1,076	吉野郡 〃
三峰山	1,235	宇陀郡御杖村(〃)	伯母子岳	1,344	吉野郡野迫川村(十津川村境)
高見山	1,248	吉野郡東吉野村(〃)	護摩壇山	1,372	吉野郡十津川村(和歌山県境)
竜門岳	904	吉野郡吉野町	牛廻山	1,207	吉野郡 〃 (〃)
国見山	1,419	吉野郡東吉野村(三重県境)	冷水山	1,262	吉野郡 〃
池木屋山	1,396	吉野郡川上村(〃)			

資料：建設省国土地理院「日本の山岳標高一覧 —1003山—」

主要河川一覧表

(延長10,000m以上)

(平成6年2月22日現在)

河川名	延長 _m	上流端	河川名	延長 _m	上流端
淀川水系	286,805		布留川	11,220	天理市苜原町字下代
宇陀川 <small>(黒田川を含む)</small>	26,865	宇陀郡大字陀町大字宮奥	岩井川	10,150	奈良市紀寺町字中谷
布目川	24,000	天理市福住町字馬返	紀の川水系	355,690	
青蓮寺川	16,850	タコラ川の合流点	紀の川 <small>(吉野川を含む)</small>	70,050	吉野郡川上村(三ノ公川合流点)
名張川	16,300	オオクタ川の合流点	丹生川	32,100	吉野郡黒滝村大字中戸
白砂川	14,700	奈良市横田町	高見川	22,300	吉野郡東吉野村大字杉谷
笠間川	14,400	山辺郡都祁村大字吐山	津風呂川	17,600	宇陀郡大字陀町大字栗野
室生川	13,400	宇陀郡室生村大字田口	四郷川	13,200	吉野郡東吉野村大字麦谷
芳野川	13,240	宇陀郡菟田野町大字岩端	宗川	12,000	吉野郡西吉野村大字西日裏
遅瀬川	11,800	山辺郡山添村大字切幡	新宮川水系	415,612	
打滝川 <small>(今川を含む)</small>	10,300	奈良市別所町	新宮川 <small>(平瀬川を流す)</small>	113,700	吉野郡天川村大字北角
大和川水系	591,877		北山川	50,540	吉野郡上北山村大字西原
大和川	42,371	桜井市大字小夫地先	川原樋川	27,800	吉野郡野迫川村大字桜股
曾我川	26,896	御所市大字重阪	西川	22,100	吉野郡十津川村大字小坪瀬
寺川	23,270	桜井市大字鹿路	東の川	14,500	吉野郡上北山村大字小椽
葛城川	23,246	御所市大字鴨神	上湯川	13,200	吉野郡十津川村大字上湯川
飛鳥川	22,296	高市郡明日香村大字栢森	西の川	12,900	吉野郡下北山村大字池峰
富雄川	21,614	生駒市高山町	神納川	12,300	吉野郡十津川村大字杉清
佐保川	14,823	奈良市中ノ川町	旭川	11,100	吉野郡十津川村大字旭
葛下川	14,740	北葛城郡當麻町大字南今市	中原川	11,000	吉野郡野迫川村大字上
高田川	13,045	北葛城郡新庄町大字南藤井	小原川	10,840	吉野郡大塔村大字篠原
竜田川	13,239	生駒市俵口町			

資料：河川課